

● シリーズ 私の見た日本 Vol.187

原宿駅で途中下車

Dmitry Kuznetsov (クズネツォフ・ドミトリー)

1988年ロシア・アルタイ地方出身。2009年～2013年フランス滞在。2013年国立パリ・ラ・ヴィレット建築大学(ENSAPLV)卒業後、文部科学省の奨学金生として来日。2020年東京大学工学部研究科建築学専攻村松研究室にて博士号を取得。



2019年から2020年にかけて、主に米国からの訪日観光客に東京を案内する機会があった。彼らはアーティストや建築家などで、歴史や文化に造詣があった。たいていは表参道周辺を散策した。彼らとの会話を通して見いだした東京、そして日本の魅力について、主なツアーポイント3カ所を例にあげながらお話ししたい。

原宿駅から明治神宮

明治神宮を参拝するとき、思い浮かぶ建築作品がいくつかある。欧州の伝統的な木造建築風で木骨を露出させたデザインの旧原宿駅駅舎、明治神宮への参道を飾る鳥居、そして明治神宮そのものである。

このエリアは伝統的な美意識を保ちながら西洋文化を取り入れた、戦前期の日本の変革そのものを表している。興味深いのは、明治初期の浮世絵である。1887年に発表された楊洲周延の「扶桑高貴鑑」(図1)では、テーブルに積み上げられた数冊の本を背景に、洋服をまといソファに腰掛ける明治天皇が描かれている。西洋からもたらされた新しい知識や技術のみならず、夏目漱石や森鷗外らの切磋琢磨により誕生した現代語などにも影響を及ぼしている。明治時代は非常にエネルギッシュで多様なスタイルが混在する若い文化であったからこそ、ジャコモ・プッチーニ作曲

の歌劇「蝶々夫人」のように、1945年に裏切られることとなる。白い陶器より漆器の素晴らしさについて記した谷崎潤一郎の著書「陰翳礼讃」、イギリスの詩人・バイロンの悲劇的な作中人物に影響を受け執筆されたと思われる夏目漱石の「こころ」に代表されるとおり、変革に抗う戦前の日本はロマンチックにさえ思える。とかく西洋文化が明治時代の日本へ及ぼした影響について語られがちだが、当時は欧州もオリエンタリズムに魅了されていた時期である。クロード・モネの絵画「ラ・ジャポネーズ」(図2)からもわかるように、根付や団扇、浮世絵版画などが欧州の芸術的価値に刺激を与えたと考えられている。

旧原宿駅駅舎(図3)の建築にはドイツの影響も垣間見られると同時に英国植民地様式を模し、1923年の関東大震災ですべてが焼失した銀座の街並みなどが思い起こされる。東京の歴史は、常に焼け野原からの劇的な復興とともにある。

明治神宮の鳥居(図4)は聖域としても興味深い。イギリスの世界文化遺産であるストーンヘンジやゴシック様式の教会など、西洋における聖域は建築物で囲われることが多いのに対して、日本の鳥居は「神」と「庶民」の領域を分かち意味をもつと聞いたことがある。鳥居をくぐると、神社までの参道は豊かな杜に覆われている。たまに隣接する代々木公園

からジョギングに訪れる外国人の姿を見かけることがあるが、境内や参道はジョギングが禁止されているため見つかると守衛に制止される。パリのノートルダム大聖堂の内部を走ると同じことである。

伊東忠太設計の社殿(図5)も独特である。外国人観光客は最初に門内の外回廊の意味を尋ねるが、それに対する答えは、伊東忠太の構造の折衷主義と歴史主義的アプローチに集約されていると考える。古代からの神社建築様式や構造を集約した明治神宮は、昔は射手を配するために使用されていたことを示唆するように外回廊を巡らせているが、それはおそらく形式的な要素に過ぎない。社殿の壁面には穴が多いが、奈良時代にそうであったように軍事利用を目的としたものではない。

明治神宮はウィーン分離派や、近代建築の三大巨匠の一人として知られるフランク・ロイド・ライト設計の東京・目白にある自由学園明日館(1921年)、岩元祿設計の旧京都中央電話局西陣分局舎(1921年)より遅れて1921年に竣工した。

国立代々木競技場

明治神宮から国立代々木競技場方面に移動すると、第二次世界大戦がもたらした劇的な変化を目にすることができる。駐留米軍に占領された代々木は、常に精神的かつ社会

的な分岐点であると感じる。明治天皇による改革に先導され、わずか80年間で西洋化や建築における擬洋風化を推し進め、富と繁栄を夢に見たが、それは広島、長崎、東京の街並みとともに奪われた。それゆえ、1964年の東京オリンピックとそれに伴う都市の変容は、戦争によるトラウマや記憶を消し去る目的があったと、私は常に考えてきた。連合国軍の占領、天皇の神格化の否定、貴族制度の廃止、未来的な形状や当時のモダンを代表するコンクリートなどの材料を多用した丹下健三の建築(図6)を重ね合わせると、東京オリンピックは、他国の建築様式に倣うアプローチから決別し、日本特有のスタイルを新たに構築する契機となったのではないだろうか。夢から覚めたような丹下健三の建築は、伝統建築や激動の過去など存在していなかったかのように、未来を見据えて佇んでいる。競技場の屋根の形状は神社を想起させるが、特に外国人の目には簡単に気づけるものではない。

国立代々木競技場の裏に建つNHKも非常に興味深い建物だ。東京オリンピック終了後に現在の地に移転したNHKの本放送が開始されたのは、冷戦期が始まった1950年代で、テレビ放送の普及に伴い国民の生活にも大きな変化がもたらされた。東アジアにおいても放送局や映画スタジオの建設が続いた。

1964年に刊行されたマーシャル・マクラーハンの著書「メディア論—人間の拡張の諸相(原題: Understanding Media: The Extensions of Man)」では、「東京オリンピックまでにメディアはメッセージになる。また、情報消費はその速度を増し、テオドール・W.アドルノの著書『美の理論(原題: Aesthetic Theory)』でも論じられたように、1970年までには芸術の価値が問われるようになる」と記している。このような状況下で、丹下健三や横文彦による建築物、東京の河川を覆う高速道路から映し出されるイメージは非現実的な印象を与えた。1960年代から1970年代の東京は地球の未来を表していたのだ。その良い例が、1972年にカンヌ国際映画祭審査員特別賞を受賞したアンドレイ・タルコフスキー監督の映画「惑星ソラリス」である。1961年にポーランド出身の作家スタニスワフ・レムが発表したSF小説が原作で、星間探検を背景とするストーリーであるが、未来都市で交わされる主人公の会話の場面では、東京の首都高速道路が用いられ、その未来的な背景を表現したのである。

キャットストリートから表参道ヒルズ

輝きを放つ国立代々木競技場の屋根に背を向け、原宿側の表参道に潜り込む。ここは戦後の米国文化の影響を色濃く残すヒップス

ター街だ。教会も多く残るが、1990年代には続々と乱立した旗艦店に挟まれたり、ショッピングモールに取って代わったりしたものもある。表参道はただのショッピングストリートではなく、日本の高度成長の歴史を物語る道だと思う。

道を下ると、渋谷川を暗渠化して整備されたキャットストリート(図7)が現れる。昔、渋谷川が流れていた側に背を向けた古い住宅は当時の工業汚染の名残である。

表参道に建つ表参道ヒルズは旧同潤会青山アパートのあった場所である。1960年代から1970年代の理想的なライフスタイルが垣間見えた旧同潤会青山アパートと、それに取って代わった安藤忠雄設計の建築物は近年の消費者主義文化を象徴している。

話したいこと、行きたいところはまだまだたくさんある。明治神宮と青山の間をゆっくり下る表参道は、過去と現在の間を行き来するように、さまざまな時代の建築作品がそのときどきの「フューチャー」を物語る。日本のみならず、全世界が夢見た、今は懐かしくさえ思える未来である。これを読んだ方が久しぶりに原宿駅で下車し、時空旅行を楽しんでくれたら嬉しい。(日本語校閲: 鈴木紀子)

